

思
考
の
障
景

T.J.クラークといえは1848年のフランス二月革命下の藝術状況に関して、1973年に『絶対的ブルジョワ』『民衆のイメージ』という2冊の本を、弱冠29歳にして同時に出版し、業界筋では革命児として知られた美術史家である。その彼が2006年には『死の光景』と題する本を出版した。2001年9月11日の「死の光景」の影も見え隠れする本書だが、主に取り上げられるのはフランス古典主義の画家、ルイ十四世絶対王権成立初期に活躍したニコラ・プッサンの《蛇に殺された男のいる風景》(1648年頃と推定)。この1枚の絵画作品を論ずるために250頁もの紙幅が費やされたといっただけでなく、画面左前景の暗闇には、大蛇に扼殺されて死後硬直状態にあるらしい男性の死体。中景には、この事態を目撃して救援を求めようと走る男、その左手には洗濯の途上、異状に気づいて両手を広げる女、そして背景には、そんな事件とは無関係のように、古代アルカディアを想定した静穏な風景が広がっている。

クラークはこの作品を読み解く際に、現場の光景はいまから朝日が射して明るくなるようとする薄明の時刻を描いたものと解釈する。危険を察知し、そこから脱しようとする男。その脚には、クラークの観察に従えば、フットライトが射している。よく見れば、それが男の足元の水面に射す陽光の照り返しであることにも納得がゆく。いままで暗黒の支配していた大地に、日光が最初の光明をもたらそうとしており、その光が逆に、水面下の暗黒の世界の闇を強調する。そしてその闇の源となるのが、蛇がとぐろを巻く、死の領分であった。ここにあっては蛇の支配する「死の光景」という言語道断の体験を脱して、言語表現の世界へと

意識
Dawn/Aufleuchten/Éveil naissant
『死の光景』の背後に溶着するロラン・バルトの目覚めの映像

意識の覚醒について

図書新聞
No.2814
2007.03.17

稲賀繁美
東京日本大学文学部
総合文化センター研究員

復帰しようとする男を、発声行為の寸前で永遠に凍結した絵画である。

だがなぜクラークは、これほど朝日の射す曙の時間帯に執着するのか。画面の精密な分析というより、画面の前にした鑑賞者の観察記録の累積的蓄積から成る本書にあって、朝日への注視は異様なまでに執拗であり、その拘泥ぶりも、背後に何か無意識の経験を宿しているように直観された。この謎は、書物も全体の三分の二を過ぎたあたりで、クラーク自身の自白によって明かされる。1968年パリの通称「五月革命」の時期、自分とはかならず《蛇に殺された男のいる風景》を、革命の証として血祭りにあげるべきだ、と宣言していた——と後に友人から聞かされたのだ、という。聖像破壊の対象となるべき作品は、それだけの意義を宿し、その喪失が取り返しのつかない損失と認識されるような作品でなければなるまい。クラークの意識の底では、《蛇》の夜明けは、インターナショナルの「夜明けは近い」の歌声とも共鳴する。それゆえ、人を扼殺する蛇に、著者は革命への暗い情念をも読み込んでいた。本書を通読すると、その間の事情も徐々に——夜明けの到来のように——明らかになってくる。

だが、この夜明けとは何なのか。それが読後に、もうひとつの疑問として残っていた。ところが偶然にもワシントン郊外の古本屋で久方ぶりに手に取った著書が、解明の糸口を与えてくれた。フィリップ・ソレルスが『テル・ケル』誌を本拠に編んだ論文集『集合の理論』(1968)。その冒頭に収められたロラン・バルトの「劇・詩・小説」に、こんな一節があったの思い出した。「語源的に言って、目覚めéveilとは宵の監視sur-veillanceであり、ここでも目覚めとは、昼であれ、

夜であれ、そのどちらによっても抹消することなどできない性質の意識の活動であり、それは、ある光景visionに関する、その場での記憶あるいは睡眠の埋蔵庫を、発話によって司るものなのだ。」(原著34頁)。バルトは「目覚め」を、「事前」としての眠りと「事後」としての覚醒状態とのあいだの中立地帯として把握していた。「生まれ来る覚醒」éveil naissantという表現もここには見える。それはやがて遠からずパリを舞台に「夜明け」のように到来する革命状況を予兆させる「生まれ来る覚醒」とも重なっていた。

到来しつつある夜明け。この表現を、クラークはヴィトゲンシュタインの『論理探求』の英訳にみられる創発的翻訳に負っている。ドイツ語では瞬間的な照明を意味するaufleuchtenに、エリザベス・アスコンプによる英訳では、光が徐々に射して事態が明らかになってくる「夜明け」dawnが自動詞として用いられたからだ。だがこの黎明の背後には、68年のパリでクラークが脱まなかったはずのないバルトの「生まれ来る覚醒」が輻輳して仄見える。クラークの「曙」の到来の裏には、その「ネガ」として、バルトの「覚醒」を忘却する航程が伏在し、その航跡が無意識の暗闇へと溶着してゆく。

※T.J. Clark, *The Sight of Death, An Experiment of Art Writing*, Yale U.P.2006.
Roland Barthes, "Drame, poème, roman," in *Tel Quel, Théorie d'ensemble*, Éd. Du Seuil, 1968.

なお阿部良雄「西欧との対話」には1968年頃のT.J.クラークとの交感を証する一章が収められている。追悼の意を込めて追記する。